

義務教育学校は予期せぬデメリットがいっぱい

「中一ギャップの解消に効果がないだけでなく

『小6問題』を生んだ」つくば市

4年後の大楽毛を皮切りに、今の学校を9年間同じ校舎で学ぶ「義務教育学校」に順次転換することを市は考えています。でも、義務教育学校がどんなものか、ほとんどの方は知りません。まだまだ全国的に少なく始まって間もない義務教育学校ですが、様々な問題が指摘されています



全国学力テストの成績では秋田県などを大きく上回るつくば市。2012年から順次、施設一体型の小中一貫校を進めてきましたか……

イ、小中一貫教育で等しく、好ましい成果はなかった。

平均点が高いのは日本の研究機関が集積している家庭の教育環境によるもの。研究学園都市地域と周辺部の学力格差は日本一と揶揄されることもしばしば。一貫校にしてもこの格差は解消されませんでした。

ロ、中一ギャップ解消には何の効果もなく、むしろ小6問題を起こした。

小6問題に今後どう対応するかが大問題に。いまさら学校を二分できないので、小6の卒業式、中1の入学式など、できるだけ小・中の区別を明確にして進めるようです。

ハ、大規模な義務教育学校は地域の核としてコミュニティづくりに機能しない。
ニ、同じ小中一貫教育でも施設一体型より、小中別の施設分離の方が望ましい。

これが、小中一貫教育検証委員会での結論です。中学に入ると

顕在化してきた義務教育学校の問題

- ①小学生から中学生へ飛躍のチャンスがなくなる。
6年生の最高学年としての自覚が育たず、中1の大人の自覚も育ちにくい。小学校高学年は中学生と自分を比較し、委縮し自己肯定感が下がる。中一リセットができない。
- ②小学生が中学のサイクルと受験競争に巻き込まれる。
中学に合わせた定期テストを行う小学校も。小学校の授業が終わっても中学はまだ授業中なので小学生があまり騒げない。とくに中学校の定期テストのとき。体育館や校庭が中学生と一緒にのたまに遊べない。行事の練習や準備が中学校の部活・カリキュラムの関係で十分できない。
- ③中学生のエネルギーを発散する場が少ない。
年長の中学生の方が小学生のために我慢することが多い。テストや進学準備に集中できない。部活が小学生と一緒に楽しむことは非常に無理がある。
- ④教員の多忙感、負担感がさらに増える。
6年間の子どもを大勢の教員で話し合っただけで会議が増え、長くなる。小学校・中学校の独自のやり方、文化がぶつかり、合意ができていく。小中一貫校の成果が求められ負担が増す。
- ⑤学校を核とした地域づくりが困難になる。
これまで培ってきた学校を核とした地域との交流、地域づくりが困難に。スクールバスで通う子が激増することにより子どもにも大きな負担。教員の多忙化に拍車がかかる。学童保育の見直しも避けて通れない。

不登校などが増えるという中一ギャップの解消が義務教育学校導入の目的とされていますが、「効果がほとんどない」との指摘は重要です。

見直しを進めた当時の教育長の門脇厚司氏（元筑波学院大学長）はたくさんの学校を廃校にして義務教育学校をつくることを「愚挙であり暴挙」と言いました。

既に義務教育学校が4校あり、解体することは現実的ではありません。6・3制の良さを生かした学校づくりに舵を切り、新たな大規模義務教育学校の開設はやめることにしました。

子どもたちへの調査



◎小中一貫校で学ぶ子どもと小中別々の一般校で学ぶ子どもの比較研究（2013年）『小中一貫校の総合的研究』から）

義務教育学校の法制化以前から特区などで施設一体型小中一貫校がつくられてきました。当時、7千人以上の子どもに自信、自己評価など、一般校と一貫校で同じ設問を行い、比較した研究です。

△自分に自信があるか▽

小学生では一般校が高く、中学段階で一貫校・一般校の差はなくなる。

△自己評価はどうか▽

小学生では一般校が上回り、中学に入って一貫校が中2で上回るが、中1、中3に差はない。

△友人は多いか▽

中1までは一般校が高く、中2で逆転するが、中3で再び一般校が上回る。

△学校に適応しているか▽

小学生は一貫して一般校が高く、中学段階では差はなくなる。

△疲労感があるか▽

全ての学年で一貫校の方が高い。

△学業の自己評価は▽

小学生では一般校が高く、中学では一貫校が上回る。

△中学校への期待と心配▽

いずれも一般校が高い。

結論的に言えば、一貫校の小学生は一般校よりネガティブです。中学段階で差の縮小、逆転も起きますが総体として差はありません。一貫校の小学生が身近な中学生との比較で自己評価が低くなること、新しいスタイルの学びや規模の大きな学校になることにストレスを感じていることなどが考えられます。

（裏面に続く）